

介護を必要とする高齢男性のデイケアへの適応過程 — 配偶者のいない高齢男性が『自分らしさ』を見つけていくプロセス —

山田 恵子*¹ 小林 れい子*² 白鳥 孝子*³ 北村 露輝*⁴ 小倉 久美子*⁵ 水戸 美津子*⁶

A study on adaptation of elderly men who need nursing at day-care facilities:
the process whereby single elderly men find their “identity”

YAMADA, Keiko, KOBAYASHI, Reiko, SHIRATORI, Takako, KITAMURA, Tsuyuki,
OGURA, Kumiko and MITO, Mitsuko

要旨

本研究は、デイケアを利用する配偶者のいない高齢男性が『自分らしさ』を見つけていくプロセスを明らかにし、デイケアに通所する高齢男性へのケアについて新たな視点を提示することを目的とした。デイケアを利用する8名の高齢男性に対し半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その結果、23概念と7カテゴリを生成した。生成したカテゴリは、【気持ちに折り合いをつける】【活力の素を得る】【気力の土台を固める】【元気だった頃を回想する】【並べられる手前味噌がある】【感謝できる環境がある】【視座が転回する】であり、【気持ちに折り合いをつける】【活力の素を得る】【気力の土台を固める】の3つのカテゴリは相互に関連するコアである。このプロセスを促進するためには、デイケアでの物的・人的両面からの環境づくりが重要となる。

キーワード

デイケア, 高齢男性, 自分らしさ

Abstract

This study aimed to clarify the process single elderly men who used day-care facility found their “identity.” In addition, a new aspect was presented about caring for elderly men who commuted every day to the day-care facility.

After obtaining their consent, we conducted semi-structured interviews with elderly men who commuted every day to the day-care facility. We analyzed this interview record using the modified grounded theory approach.

As a result, 23 concepts and seven categories were generated. The categories were as follows: “the agreement is applied to feelings,” “the source of energies is obtained,” “the origin of energy is steady,” “the pre-disease vigor is recalled,” “there are some achievements to be proud of,” “ability to express gratitude for an environment,” and “the aspect changes.”

“The agreement is applied to feelings,” “the source of energies is obtained,” and “the origin of energy is steady” were the core categories and were related to other categories. Single elderly men accepted their sickness and disability through the process of these seven categories and found their “identity.”

Key words

day-care facility, elderly men, identity

I. はじめに

我が国においては、疾病構造の変化や医療水準の向上により平均寿命が増加していることは自明であり、2050年には3人に1人が高齢者という超高齢社会に突入し¹⁾、2055年には65歳以上の高齢者人口の割合は39.4%と見込まれている²⁾。人口の高齢化が進む中、疾病の予防に取り組む必要性も然ることながら、障害を抱えながらも人生の完成期である老年期を豊かに過ごせるような環境の整備が必要である¹⁾。その一つに、自宅で介護を受けるときに、家族の介護と外部の介護サービスを組み合わ

せるなど介護保険制度を利用し、食事や入浴といった日常生活上の支援や、生活機能向上のための機能訓練などを日帰りで受けることができるデイケアがある。

高齢者はデイケアに通所することで“孤独の解消と居心地の良い環境”や“同じ境遇の新たな友達との交流”などが得られる³⁾という報告がある。また、長澤ら⁴⁾は、デイケアの利用を開始した高齢者には、開始時には見られなかった“自分らしさへの上向きな思い”が半年後に出現すると述べている。このことから、高齢者のデイケアの利用は、身体機能の回復以上に、

* 1 : 聖徳大学看護学部看護学科・助教 / * 2 : 聖徳大学看護学部看護学科・助教 / * 3 : 聖徳大学看護学部看護学科・准教授
* 4 : 聖徳大学看護学部看護学科・講師 / * 5 : 聖徳大学看護学部看護学科・助手 / * 6 : 聖徳大学看護学部看護学科・教授

新たな自分らしさを獲得する過程に大きく影響を及ぼしていると考えられる。

先行研究では、男女による違いや家族構成による違いなどは考慮されていない。しかし、臨床の現場では男女によるデイケアへの適応過程に違いがあることを経験的に実感することが多く、特に、配偶者のいない高齢男性の適応については現場の職員が苦慮することが多い。また、これまでのデイケアにおける高齢男性を対象とした研究では、身体機能訓練は高齢男性自身の社会的評価を確認するツールとなって継続されていること⁵⁾や、高齢男性がデイケアで実施したいと望む作業は高齢女性と異なり社会的レクリエーション活動であること⁶⁾、在宅生活継続を可能にしているサポートを獲得するプロセスに心理面が影響していること⁷⁾などが報告されているが、デイケアにおいて、高齢男性がどのような体験のなかで『自分らしさ』を見つけていくのかというプロセスを明らかにしたものはない。

そこで、本研究においては、配偶者のいない高齢男性が、障害を得た後に利用するデイケアにおいて、どのような体験をし、どのように『自分らしさ』を見つけていくのかというプロセスを明らかにし、デイケアに通所する高齢男性へのケアについて新たな視点を提示することを目的とする。

II. 用語の定義

本研究で用いる『自分らしさ』は、「自分の行為を自ら選択して決めること」とした。

III. 研究方法

1. 研究対象者

デイケアに通いながら在宅生活をしている配偶者がいない65歳以上の男性を対象とした。認知症の診断がある者は研究対象者から除外した。研究対象者の選定にあたっては、Aデイケアの協力を得た。

2. データ収集

データ収集は2014年9月1日から30日の期間に実施した。研究の同意が得られた研究対象者に「デイケアの利用のきっかけ」「デイケアでの過ごし方について」「家ででの生活について」「配偶者でない家族との関係について」のインタビューガイドをもとに半構造化面接を実施した。時間は30分から60分程度の1回とした。インタビューは、研究対象者の了承を得た上でレコーダーに録音し、インタビュー後に逐語録を作成した。

3. 分析方法

本研究は、木下⁸⁾の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach: 以下、M-GTA) を用いて分析した。分析テーマは、「デイケアを利用する配偶

者のいない高齢男性が『自分らしさ』を見つけていくプロセス」とし、分析焦点者は「デイケアを利用する配偶者のいない高齢男性」(以下、高齢男性)とした。

分析テーマに照らしてインタビューが最も充実した内容が語られていると判断した逐語録から分析を始めた。分析は、対象者の逐語録全体に目を通した後、分析テーマに基づき関連個所に着目し、それを1つの具体例(以下、バリエーション)とし、その意味を解釈し定義とした。さらにその定義から概念名を生成した。バリエーションの抽出から概念生成には分析ワークシートを用いた。2事例目以降も同様に分析した。

生成した概念と他の概念との関係を比較検討しながら、カテゴリーを生成した。カテゴリー相互の関係から分析結果を結果図としてまとめた。

本研究の分析過程はM-GTAの分析手法に精通した研究者を中心に、生成した概念と概念間の関係を研究者間で何度も繰り返し討議をして信頼性・妥当性の確保に努めた。

4. 倫理的配慮

本研究は、聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理審査委員会の承認を得て実施した。研究対象者に、直接、研究の趣旨を伝え、匿名性の保持と目的以外にデータを使用しないこと、参加・協力・取り消しの権利の保障、インタビューを録音すること、論文作成後はデータを破棄することを書面および口頭で説明し了解を得た。

IV. 結果

1. 研究対象者の概要

研究対象者は、研究参加の同意が得られた高齢男性8名であり、平均年齢71.9歳であった。配偶者以外の同居がある者4名とない者4名であり、介護度は1から4で、デイケアの利用頻度は週に2回から4回であった。

2. 分析結果

分析の結果、7カテゴリーと23概念を生成した(表1)。ストーリーラインは、以下である。結果図は、図1として示した。なお、【】はカテゴリー、<>は概念、『』は定義、「」はバリエーションとして表記する。

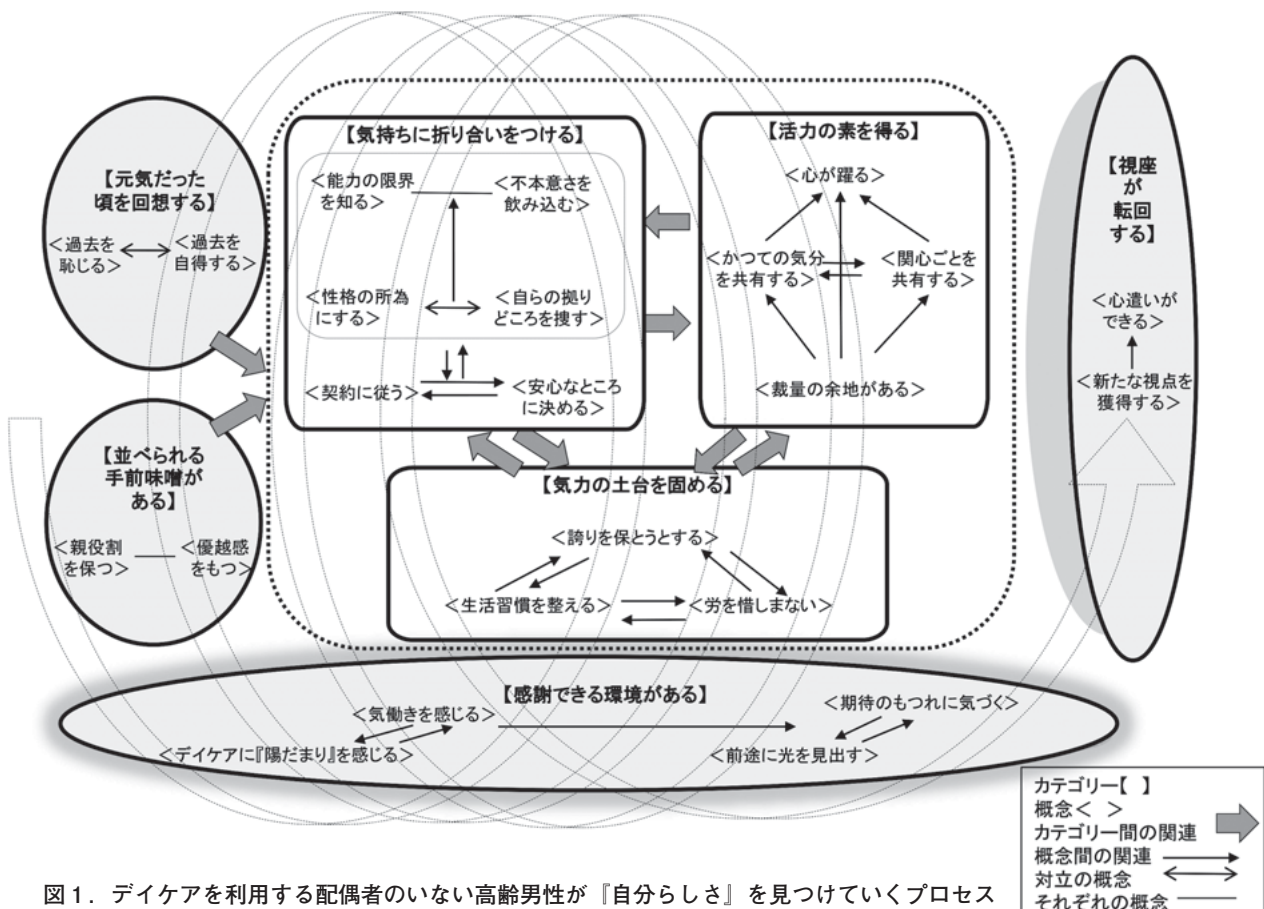
1) ストーリーライン

高齢男性が自分らしさをみつけていくプロセスのコアとして、【気持ちに折り合いをつける】こと、【活力の素を得る】こと、【気力の土台を固める】ことがある。この3つは相互に関連させながら自分らしさをみつけるプロセスのコアとして展開される。

まず、【気持ちに折り合いをつける】とは、高齢男性が日常生活で病気や障害のために思い通りにいかないことなどをく性

表 1. 生成した概念とカテゴリー

カテゴリー	概念	定義
気持ちに折り合いをつける	自らの抛りどころを捜す	自分の値打ちを見出すために葛藤すること
	能力の限界を知る	いくら努力をしても加齢や障害のためにできなくなることがあるという現実を受け入れること
	不本意さを飲み込む	デイケアに来ること、来ていることは不本意だが、納得しようと努めること
	性格の所為にする	健康を害する前からの性格の所為にすることで自分を保つこと
	契約に従う	取り決めに従って通所していること
	安心なところを決める	顔見知りの人達と継続的なかわり方で安心感を得ながらリハビリを続けたいと思うこと
活力の素を得る	裁量の余地がある	人に指示されずに振る舞うことができること
	かつての気分を共有する	同じ時代を生きてきた人達と交わることで経験したエピソードを思い出すこと
	関心ごとを共有する	自分の志向と一致する仲間と一緒に過ごすこと
	心が躍る	人と競争できることでわくわくすること
気力の土台を固める	誇りを保とうとする	不自由な体であっても自分でできることは自分でしようとする
	労を惜しまない	回復した機能を十分に生かすように努力すること
	生活習慣を整える	自分が決めた生活習慣を主張し実行すること
元気だった頃を回想する	過去を自得する	思い通りにできていた頃の自分を思い出して自賛すること
	過去を恥じる	勝手気ままな生活をしてきた頃の自分を思い出して過去の無知を恥じる
並べられる手前味噌がある	優越感をもつ	得意気になるものがある
	親役割を保つ	病気や障害になっても親役割を果たそうとすること
感謝できる環境がある	デイケアに“陽だまり”を感じる	想定外の心地よさにありがたい気持ちになること
	気働きを感じる	常にスタッフが見守ってくれていることに感謝できること
	期待のもつれに気づく	お互いの期待のずれに気づきながらも葛藤の渦中にあること
	前途に光を見出す	できないと思っていたことができるようになったことで救われたと思うこと
視座が転回する	新たな視点を獲得する	病気にならないとわからないことがあると自覚すること
	心遣いができる	他人の辛さを自分の辛さとして感じて配慮すること



格の所為にする><自らの拠りどころを捜す>といった葛藤をくり返しつつ、<能力の限界を知る>ことや<不本意さを飲み込む>ことである。一方で、<契約に従う><安心なところに決める>ことでデイケアに通うことを自分自身に納得させる。

次に、高齢男性は【活力の素を得る】ために、同世代の人たちとくかつての気分を共有する>ことや自分と同じようなく関心ごとを共有する>ことで活気に満ちていた頃を思い出す。また、デイケアでは障害があっても人と競争できるものがあることで<心が躍る>経験をし、さらに人に指示されずに振る舞える<裁量の余地がある>ことでも元気になれる。

さらに、高齢男性は【気力の土台を固める】ために、健康を維持しようと<生活習慣を整える>ことや回復した機能を低下させないように<労を惜しまない>工夫をして配偶者がいない生活のなかで努力する。このことを通じて、不自由な身体であっても<誇りを保とうとする>。

このコアに、【元気だった頃を回想する】ことや【並べられる手前味噌がある】ことが結びつくことで、高齢男性の過去と現在、さらには未来の希望へとつながる。【元気だった頃を回想する】は、勝手気ままなく過去を恥じる>ことで自分を戒め、一方で、輝いていた頃の自分を思い出して<過去を自得する>。また、【並べられる手前味噌がある】は、高齢になり病気や障害があっても<親役割を保つ>ことや、得意気になるものがまだあるといった<優越感をもつ>ことである。

これらを促進させるには、【感謝できる環境がある】ことが重要である。つまり、常にスタッフの<気働きを感じる>環境のなかで自宅では得られにくい心地よさとして<デイケアに“陽だまり”を感じる>ことができる。そのなかで、スタッフと自分との<期待のもつれに気づく>ことや<前途に光を見出す>ことができる。

そして、病気にならないとわからないことがあると自覚することで<新たな視点を獲得する>。さらには他人の辛さを自分の辛さと思えるようになり<心遣いができる>自分を発見する。これにより【視座が転回する】。

2) 生成されたカテゴリーと概念

(1) 気持ちに折り合いをつける

【気持ちに折り合いをつける】は、<性格の所為にする><自らの拠りどころを捜す><能力の限界を知る><不本意さを飲み込む><契約に従う><安心なところに決める>の6概念で構成される。<性格の所為にする>は、『健康を害する前からの性格の所為にすることで自分を保つこと』と定義した。バリエーションは、「しゃべらない方だからね。そうですよね、声をかけてくださる方もいるけどね。自分からはね進んで話さない。これは性格ですね。」などがあつた。<自らの拠りどころを捜す>は、障害をもってしまった自分の支えとなる人、モノ、

場所を捜すことで『自分の値打ちを見出すために葛藤すること』と定義した。バリエーションは、「元気にね。ころっと死ぬまで元気でなくちゃだめ、人間は。こんなんになって生きてたって何の役にも立たないし、人に迷惑かけるだけ。なんかすごい薬ないかね。あの、誰にも迷惑かけないでころっといけるやつ。」などがあつた。<能力の限界を知る>は、『いくら努力しても加齢や障害のためにできなくなることがあるという現実を受け入れること』と定義した。バリエーションは、「私の場合は、自分で風呂に入れないから。自宅の風呂あるんだけど、自分で風呂に出ないでしょう。シャワーをするつもりでチャレンジしたんだけど、風呂場の敷居でもって、ひっくり返っちゃったの。一人で。一人住まいだから。」などがあつた。<不本意さを飲み込む>は、『デイケアに来ること、来ていることは不本意だが、納得しようと努めること』と定義した。バリエーションは、「家にいると一人でしょ。そうです。会えて楽しいよ。同年代の人と話すし。なかには気に入る人もいるけど、そういうのは気にしないから。気にすると、来るの嫌になっちゃうから、そういう人はあまりあれしないようにして。」などがあつた。<契約に従う>は、『取り決めに従って通所していること』と定義した。バリエーションは、「週2回だけど。決まりだからね。しょうがねえから行くとこでしたかね。」などがあつた。<安心なところに決める>は、『顔見知りの人達と継続的なかわりで安心感を得ながらリハビリを続けたいと思うこと』と定義した。バリエーションは、「リハビリの先生もある程度ここにいた人もいたから。お世話になろうと思ったんです。ほかを知らないからね。リハビリの続きっていうんですか。安心感っていうか。リハビリの先生方を知っていたから。」などがあつた。

(2) 活力の素を得る

【活力の素を得る】は、<かつての気分を共有する><関心ごとを共有する><心が躍る><裁量の余地がある>の4概念で構成される。<かつての気分を共有する>は『同じ時代を生きてきた人達と交わることで経験したエピソードを思い出すこと』と定義した。バリエーションは、「やっぱり年が似ているから。大体昔の話もするしね。テレビを見ながらね。スポーツの話から、いろいろ毎日しますよ。だから、そういうメンバーでも会うのが楽しみ。」などがあつた。<関心ごとを共有する>は、『自分の志向と一致する仲間と一緒に過ごすこと』と定義した。バリエーションは、「なんって言うの。うちじゃほら一人だからな。寂しいしな。(話は)しなくてもね。みんながいるから。同じ話とかみんなしてるからな。よくなるとかリハビリ頑張っているとかさ。そういうのをね。あるね。うんある。」などがあつた。<心が躍る>は、『人と競争できることでわくわくすること』と定義した。バリエーションは、「ここはね、将棋だのやったんだけど、弱いから負けちゃうんだよ。

ここの人は遠慮しねえんだよね。俺、まだ覚えてただから、教えてくれたって。普通さ、弱い人から先やるんだから将棋はね。ここ、じゃんけんだよ。じゃんけんで負けちゃうとき、勝った人が先やっちゃうんだもん。弱い人を先やらせなくちゃだめだよ。それで、負けちゃうんだよ、いつも。うちで孫とやっても負けちゃうんだけど、弱いんだよね。だから最近やんねえんだ、負けてばかりだ。たまに勝たしてくれなくちゃ、先やっていいよとかって言ってね。それ先やっちゃうんだ、もう。それで勝って喜んでんだ。」などがあつた。〈裁量の余地がある〉は、限られた範囲であっても『人に指示されずに振る舞うことができること』と定義した。バリエーションは、「自由が利くところですね。あれしなさい、これしなさいって云われな。好き勝手ができる。自由はいいことです。本当に。」などがあつた。

(3) 気力の土台を固める

【気力の土台を固める】は、〈生活習慣を整える〉〈労を惜しまない〉〈誇りを保とうとする〉の3概念で構成される。〈生活習慣を整える〉は、『自分が決めた生活習慣を主張し実行すること』と定義した。バリエーションは、「トイレ行って。水ちょこっと飲んで。大便が出ないんだよね、水飲まないよね。水飲むようにしてさ。」などがあつた。〈労を惜しまない〉は、『回復した機能を十分に生かすように努力すること』と定義した。バリエーションは、「やってますね。(洗濯、干したり) うん。リハビリだと思ってる。やってる。そうだね。お母さん(亡くなった妻)が、そうやってたから。見よう見まねで。それまで、家の仕事なんか、全然やったことない。みんな、お母さん(亡くなった妻)まかせで。」などがあつた。〈誇りを保とうとする〉は、自分の誇りを保つために『不自由な体であっても自分でできることは自分でしようとする』と定義した。バリエーションは、「この着替えがなんちゅうたって大変。ほんで、やっこ着替えて、ああ着替えたつうと、毛が見えたり、反対に履いてたりなんかで、ああせっかく着た(の)に、また着替えたり。ほんとだから。それで気持ちが焦るから、ますます混乱して。だから、どっか行くちゅうたら、30分くらいかかるよね。」などがあつた。

(4) 元気だった頃を回想する

【元気だった頃を回想する】は、〈過去を恥じる〉〈過去を自得する〉の2概念で構成される。〈過去を恥じる〉は、『勝手気ままな生活をしてきた頃の自分を思い出して無知を恥じる』と定義した。バリエーションは、「だいたい酒飲んだり、たばこ吸ったり、コレステロールがたまるような油もんが大好きとか。だいたい聞くとそうだから。ああ、こんでみんな病気だ。おら、かかっちはじめて気がつくんで。飲んだり食べとったりしてる時は誰もわかんないから。」などがあつた。〈過去を自得する〉は、『思い通りにできていたころの自分を

思い出して自賛すること』と定義した。バリエーションは、「あと運転士はね。運転士さんは俺のいうなりでさ。うん。こっからここまでオーライだからって行くってんで。ポイントは自分でダウンロードしたやつよ。どっからどこまで開通オーライって。そこまで行って。あと駅と打ち合わせしたりなんかして。」などがあつた。

(5) 並べられる手前味噌がある

【並べられる手前味噌がある】は、〈親役割を保つ〉〈優越感をもつ〉の2概念で構成される。〈親役割を保つ〉は、『病気や障害になっても親役割を果たそうとすること』と定義した。バリエーションは、「行つたつてつまらないもん。みんなかわいそうでしょ。だって、運転したり、俺のこと歩けないから車いす持って来てでしょ、家の中から。せがれが運転したり、こうやって俺のことを引っ張って歩く。かわいそう。だから、今は行かなくて言う。」などがあつた。〈優越感をもつ〉は、『得意気になるものがある』と定義した。バリエーションは、「でもみんな俺が教えてやっている、とにかく俺が教えてやる。関係ないの。誰でもいいの。誰かがやらなきゃなんねえから。」などがあつた。

(6) 感謝できる環境がある

【感謝できる環境がある】は、〈気働きを感じる〉〈デイケアに“陽だまり”を感じる〉〈期待のもつれに気づく〉〈前途に光を見出す〉の4概念で構成される。〈気働きを感じる〉は、『常にスタッフが見守ってくれていることに感謝できる』と定義した。バリエーションは、「水もなんも飲めないことを体験した人間がね、最初ね、例えば水が置いてあつてね、みんなお風呂に入ってね、そしたら普通の人だいたい(お風呂から上がつて)水飲みますよね。でも、飲めないあれ(人)もいる、じつと(水)見ているんですね。とうとう口をゆすぎたいと言って水のそばに行くんですね。意識的にね。そうすると、ここの職員さん、どっかから来るんかね。あんた、自分の身体のこと分かっているのって。っていう言い方じゃないけどね。そんなふうに見てくれていますよ。ああ、ここまで見てくれているんだって感心しますよ。」などがあつた。〈デイケアに“陽だまり”を感じる〉は、『想定外の心地よさにありがたい気持ちになる』と定義した。バリエーションは、「ここに来るとね、お風呂に入れてもらえて、リハビリもしてもらえて、帰る前にはお茶も入れてくれるから、そういうことが違いますね。帰りにはお茶も入れてもらえて。こんなありがたいことはないですね。」などがあつた。〈期待のもつれに気づく〉は、『お互いの期待のずれに気づきながらも葛藤の渦中にある』と定義した。バリエーションは、「まず食事とかもね、病気にならないとわからないですね。そうです。わからないっておかしいけどね。大感謝ですよ。最初時間がかかったんだけど。医者からOKが出て、リハビリの方が喜んでくれて、有難いですよ。」

本当は自分が喜ばなきゃならないのに、びっくりしました。有難かったですよ（涙）。もちろんこれはね、病気の上のことですからね。病気になってからとは意味が違うからね。だってね、自分の意志があっても身体がうごかないですからね。病気はするもんじゃありませんよね。なってみないとわからないことです。」があった。＜前途に光を見出す＞は、『できないと思っていたことができるようになったことで救われたと思うこと』と定義した。バリエーションは、「ひとつはね、できるようになったってことですよ。有難いことです。それがね、さっき云った食事のことですね。口から入らないことを覚悟したけど、それが叶ったんですよ。有難いことです。リハビリですよ。えとね、顔を手で洗えねんだから。ここまでしかあがれねえんです。でもまあここに来るようになって、あっ、よかったって思うんです。もうちょっとだから、顔洗えるようになる。」などがあった。

(7) 視座が転回する

【視座が転回する】は、＜新たな視点を獲得する＞＜心遣いができる＞の2概念で構成される。＜新たな視点を獲得する＞は、『病気になるいとわからないことがあると自覚すること』と定義した。バリエーションは、「俺は案外頑固もんだったんだよ。自分が思ったことは通す方だった。病気になって、それが間違っていたなと思って。あまり頑固でいちゃだめだと。みんなに嫌われちゃう。」などがあった。＜心遣いができる＞は、『他人の辛さを自分の辛さとして感じて配慮すること』と定義した。バリエーションは、「しゃべれない。無理に話しかけたらもうね、気の毒だから。うん。それでなくちゃ、私はしゃべるから、で、相手がしゃべれねえんじゃ気の毒だから。その反対の立場になっちゃ、つらい、つらいかもね。だから、たいがい言葉のできない人は、にこって笑って、ああって。手でこうやんば、たいがい言葉がだめだちゅういってることだから。ああ、これは失礼になるとこ来ちゃったな。二度と聞かない。」などがあった。

V. 考察

1. 『自分らしさ』を見つけていくプロセス

高齢男性が『自分らしさ』を見つけていくプロセスは、【気持ちに折り合いをつける】、【活力の素を得る】、【気力の土台を固める】ことの3つを相互に関連させながらこれをコアとして、【元気だった頃を回想する】ことや【並べられる手前味噌がある】ことに支えられ、さらに、これらに【感謝できる環境がある】ことで、前向きに【視座が転回する】というものであった。

この前向きに【視座が転回する】ことで、病気や障害によって生じる困難を乗り越えることができる。それは、病気になるいとわからないことがあるものだと心底実感することであり、さらに他人の辛さを自分自身の辛さとして感じたうえで、他人

に配慮する行為をとることで獲得できるものである。これは、沖中⁹⁾が言う高齢者には「老いた自分が情けない、どんなに頑張っても回復には限界がある、という“人生に立ちほだかる思い”がある」ことや、越猪ら¹⁰⁾が指摘する「老いや身体の衰え、身体の不自由さにより、自分自身の生活能力の低下を実感し、家族など他者に身の回りのことを依存せざるを得なくなることが自尊感情に影響を与える」ことをも克服させるものである。

この前向きに【視座が転回する】ためには、その周囲に常に【感謝できる環境がある】ことが必要であった。特に配偶者のいない高齢男性にとっては、普段自分を気にかけてくれる人がいないと感じていても、ここでは食事や入浴の世話、機能訓練の実施だけでなく、常にスタッフが見守ってくれており、さらにお茶まで入れてくれるという配慮をありがたく思える環境によって【視座が転回する】ことを促進していると考えられる。つまり、配偶者がいないことからくる不自由さと寂しさがその感謝できる環境をより強く感受できるようにしていると考えられる。インタビューの中で、お茶を飲むこと、食事をする、入浴をすること、口をゆすぐこと、話を聞いてもらえるなどのデイケアで行われる日常的なケアに感謝する発言が多くみられることから推察できる。本研究対象者が利用するデイケアのスタッフが何気なく行っているケアは、配偶者がいない高齢男性の自宅では得られにくい【感謝できる環境がある】ことであると確認できる。このような環境はどのデイケア施設にもあるものではない。本研究の対象者が通うデイケアには、＜気働きを感じる＞＜デイケアに“陽だまり”を感じる＞などの感謝を生み出すスタッフや仕組みが豊富に準備されていると言える。

2. デイケアの環境づくりの重要性

本研究では、自分らしさを見つけていくプロセスのコアとして【気持ちに折り合いをつける】こと、【活力の素を得る】こと、【気力の土台を固める】ことの3つが相互に関連し合うことの必要性が明らかになった。そのためには＜自らの拠り所を捜す＞ことが可能な環境が用意されなければならない。これは、自分の支えとなる人、モノ、場所を捜しながら自分の値打ちを見出すために葛藤することである。岸上¹¹⁾は、「デイケアにおいて男性は、苦しい中の努力を続け、他人評価が向上することで社会評価を取り戻す」として高齢男性の拠り所としての社会的評価の重要性を指摘しているが、このことは、本研究の不自由な身体であっても自分でできることは自分でしようとする＜誇りを保とうとする＞ことと重なる。そのため、デイケアのスタッフは高齢男性が、トイレ、食事、更衣などの日々の場面で時間がかかり上手にできないことがあっても、高齢男性が自らの誇りを保つために努力していることに気づき、認め、他者にも伝えていくことで高齢男性の他者評価をも向上させ、社会評価を取り戻す支援につながると考えられる。

さらに、同じ時代を生きてきた人たちと経験したエピソードを思い出しかつての気分を共有する>ことや、自分の志向と一致する仲間と<関心ごとを共有する>ことで<心が躍る>体験をし、限られた範囲であっても人に指示されずに振る舞うことができるという<裁量の余地がある>ことで、時には人と競争できるという<心が躍る>体験を可能とする【活力の素を得る】環境設定がぜひ必要である。つまり、外山¹²⁾が指摘する「高齢者に舞台に上がっていただく仕掛けが必要だ。高齢者が“その気になれる”場づくりが不可欠」である。本研究対象者の通うデイケアにおいては、気の合う仲間、志向が合う仲間や同世代の仲間との小集団の自由な活動が行えるような仕組みづくりが随所にあった。多くのデイケアが「皆で一斉に同じことを行う」という慣習を見直し、レクリエーションでは高齢男性が自分の居場所を自由に選択でき、仲間と共に過ごし、時に仲間と競争するなどして心が躍る体験ができるように整備することが必要である。本研究対象が利用するデイケアはこれらができるスタッフと施設の環境が整っていたと言える。

上記のコアに【元気だった頃を回想する】ことや【並べられる手前味噌がある】ことが結びつくことで、高齢男性の過去と現在、さらには未来の希望へとつながる。この回想することや並べるという行為は、話す相手や聴いてくれる相手がいないと成立しない。そのため、そのことを意識し、工夫しながらコミュニケーションをとるスタッフやボランティアを教育し配置することが必要である。

最後に【感謝できる環境がある】ことが重要である。インタビューの中で、お茶を飲むこと、食事をする、入浴をすること、口をゆすぐことなどのデイケアで行われるケアに感謝する発言が多くあった。また、自宅では家族がいても時に失敗して<能力の限界を知る>こと、配偶者がいない不自由さについても<不本意さを飲み込む>高齢男性がいた。デイケアにおいても自宅にいると感じられる集団の中の一人（個）として見てくれているスタッフの気働きに対して、自宅以上に安心できる“陽だまり”を感じるのである。このような細やかなケアへの感謝の気持ちが生じる環境においては、自分自身を顧みる機会が増え、『自分らしさ』を見つめるプロセスが促進される。

水戸¹³⁾は、高齢者が大切にされていると感じることを増やす具体例として、「言葉ではなく日常の一つひとつのケアをていねいに行うことが“あなたを大切に思っていますよ”というメッセージにつながる」と述べている。高齢男性が『自分らしさ』を見つけていくためには、物理的な環境だけでなくスタッフも環境要因の一つであることを意識して、意図的に心を込めてケアにあたるのがデイケアにおける環境設定の重要な視点である。デイケアという場所やスタッフが生み出す“陽だまり”という環境は、高齢男性が『自分らしさ』を見つめられる環境の重要な要素である。

VI. 結論

高齢男性が『自分らしさ』を見つけていくプロセスは、7カテゴリーと23概念で説明することができる。これは、【気持ちに折り合いをつける】【活力の素を得る】【気力の土台を固める】の3つが相互に関連してコアを形成し、【元気だった頃を回想する】【並べられる手前味噌がある】が結びつくことで、高齢男性の過去と現在、未来への希望へと広がり、さらに、これらを促進させる【感謝できる環境がある】ことで高齢男性の【視座が転回する】のである。

このプロセスにはデイケアでの環境づくりが重要である。特に<自らの拠り所を捜す><かつての気分を共有する><関心ごとを共有する><心が躍る><裁量の余地がある>ための環境設定が必要である。そのためには、物的・人的両面からの環境づくりが重要となる。

本研究の結果はデイケアを利用する配偶者がいない高齢男性の8名の語りを分析して生成されたものである。今後は配偶者がいる高齢男性を対象として調査を継続し、さらに高齢女性に対する調査も加えて、高齢者のデイケアへの適応のプロセスの全体像を明らかにする必要がある。

文献

- 1) 厚生労働省. 健康21 (総論) http://www1.mhlw.go.jp/topics/kenko21_11/s0.html 2015.8.16
- 2) 厚生労働省. 今後の高齢者人口の見通しについて http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiiki-houkatsu/dl/link1-1.pdf 2015.8.16
- 3) 益田育子. (2008). デイケアを利用している高齢者が感じているデイケアの効果. 第39回地域看護. P45-50
- 4) 長澤久美子, 千葉のり子. (2014). 高齢者の通所リハビリテーションに対する思いの変化-通所リハビリテーション利用開始時と利用半年後を比較して. せいいい看護学会誌. 4(2). P7-13
- 5) 岸上博俊. (2010). 障害を有する男性高齢者が身体機能を継続していくプロセスについて-通所リハビリテーション利用者を対象に-. 北海道作業療法. 27(1). P14-21
- 6) 竹内さより. (2012). 通所リハビリテーションおよび通所サービスを利用する高齢者が実施したいと望む作業について. 甲南女子大学研究紀要. 6. (看護学・リハビリテーション学編). P61-67
- 7) 山根友絵. (2012). 要支援一人暮らし男性高齢者のサポート獲得プロセス. 日本看護研究学会雑誌. 35(5). P1-11
- 8) 木下康仁. (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践的研究への誘い. 弘文堂
- 9) 沖中由美. (2011). 在宅で老いを生きる要介護高齢者の自己意識. 日本看護研究学会雑誌. 34(2). P119-129
- 10) 越猪彩加, 生野繁子. (2010). 通所リハビリテーション利用高齢者の自尊感情と主観的健康観・役割意識の関連. 第41回日本看護学会論文集. 地域看護. P165-168
- 11) 岸上博俊. (2011). 通所リハビリテーションを利用する障害高齢者が身体機能訓練を継続する意味. OTジャーナル. 45(6). P599-605
- 12) 外山義. (2003). 自宅でない在宅 高齢者の生活空間論. 医学書院. P34-37
- 13) 水戸美津子. (2011). 高齢者の看護観察をはじめるために. 新看護観察のキーポイントシリーズ高齢者. 水戸美津子編. 中央法規. P4-10